第一次世界大戦におけるイギリス赤十字・ボランタリー救護部隊
――部隊の軍隊化と女性メンバーの活動――

黒川　章子*

1909年，戦時傷病兵救護を目的としてイギリス陸軍省が作成した「イングランドおよびウェールズにおけるボランタリー救護組織計画　Scheme for the Organization of Voluntary Aid in England and Wales」に基づき，ボランタリー救護部隊がイギリス全土に設立されていった。同部隊は，第一次世界大戦期イギリスの戦争遂行体制のなかで大きな役割を果たし，戦後1923年に新しい「ボランタリー救護部隊」として再編成され，第二次世界大戦においてもその活動を継続した。そして，1984年にいたって，その使命を終え歴史上からその姿を消した。ボランタリー救護部隊の活動には，イギリスボランタリズムの伝統が反映していたが，それらは，19世紀末から20世紀初頭にかけて始まった国家とボランタリー組織の「パートナーシップ」をより一層発展させたものであった。しかし，同時に，陸軍省の依頼をうけ，ボランタリー救護部隊を組織した赤十字社は，ほかのボランタリー組織とは決定的に異なる性質，すなわち，戦時にはジュネーブ条約に拘束され，軍の管理下に入るという性質を持っていた。また，実質的にも救護部隊は軍との共同行動なしにはその役割を果たしえないという制約に縛られた。それ故に，救護部隊の活動にイギリスボランタリズムの伝統は見られるものの，戦争の進行とともに救護部隊はボランタリー的側面を失いつつ，軍隊化していった。しかし，同時に，救護部隊における女性たちの規律ある行動は，それまで社会的に活動する場を与えられなかった女性たちの潜在的能力を引き出し，その力を社会に認めさせていくことにもなった。

キーワード：女性メンバーの自主的な訓練活動，ボランタリー救護部隊の「軍隊化」，女性の社会進出，イギリスボランタリズムの伝統

目　次

はじめに
１．ボランタリー救護部隊計画発表以降の準備期
（１）不明確なボランタリー救護部隊の役割
（２）戦争前の女性たちの主体的な訓練活動
２．戦争の勃発とボランタリー救護部隊
（１）ボランタリー救護部隊の活動の広がり
（２）女性の職場進出とボランタリー救護部隊
３．ボランタリー救護部隊の軍隊化
（１）戦争遂行策に組み込まれていくボランタリー救護部隊
（２）ボランタリー救護部隊メンバーに求められたもの
４．ボランタリー救護部隊メンバーの体験
（１）戦争の実態と過酷な労働
（２）中流階級出身のボランタリー救護隊メンバー
（３）終戦前後のボランタリー救護部隊
おわりに

＊立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

はじめに

イギリス・ボランタリー救護部隊は，この間公表してきた拙稿で明らかにしてきたように，1909年，陸軍省から発表された「イングランドおよびウェールズにおけるボランタリー救護組織計画」によって設立されたものである。

この部隊は軍の医療部隊の補完を目的として，軍の要請によってイギリス赤十字社が中心になって組織したものであった。ボランタリー救護部隊は，第一次世界大戦中，イギリスの戦争遂行体制のなかで大きな役割を果たした。1923年，同部隊は新しい「ボランタリー救護部隊」として再編成され，第二次世界大戦においてもその活動を継続し，最終的には1984年に解散となり，二つの世界大戦で活躍した後，その使命を終えた。

今ではすでに存在しないボランタリー救護部隊であるが，今日でも赤十字活動の研究のなかで，また，イギリス女性史研究において注目されている。

赤十字活動の研究では，ボランタリー救護部隊の活動の特徴を同国のボランタリズムと関わらせて語られる場合が多い。現に，ボランタリー救護部隊は，女性たちのボランタリーな意志なしには存在しえなかった。その点からもボランタリー救護部隊は，イギリス赤十字運動の特徴を語る上で欠くことのできないものである。

また，女性史研究において注目されているのは，ボランタリー救護部隊が国家の目的のためにイギリスの歴史上初めて女性たちが公的に組織された活動の一つだからである。それまで女性は「二流市民」として社会的な活動から締め出されていたが，ボランタリー救護部隊の活動は，女性たちを社会の表舞台に引き出した。

これらの研究をふまえ，以下の二つの論点を検討していきたい。第一に，イギリス赤十字社・ボランタリー救護部隊の活動にイギリスのボランタリズムの伝統がどのように反映されたのか検討する。第二に，ボランタリー救護部隊の担い手であった女性たちのボランタリーな活動の在り様と戦後における彼女たちの社会的立場への影響を明らかにする。

そのために，本稿では第一次世界大戦期に焦点を当てる。というのも，第一次世界大戦期は，ボランタリー救護部隊の創設から，その活動の確立までの試行錯誤の時期であり，設立当初，自主的で自由な雰囲気のあった部隊の活動が，総力戦のなかで次第に軍の体制に組み込まれていく経緯が明確になる時期だからである。

以上のような視点からボランタリー救護部隊の活動を解明するために，本稿では，以下の資料を中心に検討していく。

第一に取り上げるのは，赤十字（*The Red Cross*）誌[1)]の検討である。同誌は，1914年からイギリス赤十字社本部から発行された月刊誌であり，イギリス各地域の赤十字支部の活動やボランタリー救護部隊の活動を月単位で詳細に紹介し，国民に赤十字の意味と役割を啓蒙宣伝したものである。

第二は，ボランタリー救護部隊の活動を管理した赤十字社と聖ヨハネ修道会との戦時合同委員会がまとめた報告書，*Reports by the Joint War Committee and the Joint War Finance Committee of the British Red Cross Society and the Order of St.John of Jerusalem in England on Voluntary Aid rendered to the Sick and Wounded at Home and Abroad and*

to British Prisoners of War, 1914-1919 with Appendices（1921）[2] である。ここには，陸軍省から戦時合同委員会に求められたボランタリー救護部隊を含むあらゆる活動分野の報告が記載されている。

第三は，戦時における女性の活動にかんする手紙や議事録や新聞記事などの多様な文書から構成されている *The Women at Work Collection from the Imperial War Museum*（1985）[3] である。そのなかの *Part 2 : British Red Cros Society, Colonies, Decorations and Honours and Education* のうち Reel 25 から Reel 31 までが，The British Red Cross Society の Collection であり，これまでも取り上げてきたものである。

第四は，女性ボランタリー救護部隊メンバーが，活動中に家族や友人に送った手紙である。それは，帝国戦争博物館（Imperial War Museum）の記録部門に Collection [4] として保管されており，そこには，部隊の活動内容やメンバーたちの思いが詳細に記述されている。

本稿は，これらの資料をもとに，第一次世界大戦勃発直前から1918年の戦争終結の時期までを考察対象とし，ボランタリー救護部隊が自主的な訓練をはじめたときから，総力戦のもとで部隊が「軍隊化」し，戦争体制の中に組み込まれていく過程を明らかにするものである。同時に，メンバーたちの戦時中の活動が戦後の女性の多様な活動を準備したことをも明らかにする。

１．ボランタリー救護部隊計画の発表以降の準備期

（1）不明確なボランタリー救護部隊の役割

1909年，陸軍省の「ボランタリー救護組織計画」の発表を受けて，イギリス各地では，応急処置と家庭看護の資格証明書を持った女性たち，あるいは入隊後資格を取得するという条件の下に予備資格証明書を持った女性たちが，この部隊に参加していった。その数は，A.サマーズ（Anne Summers）の「天使と市民――軍看護婦としてのイギリス女性1854年～1914年――」によると，1910年末には約8000人，1912年初頭には2万6000人，第一次世界大戦勃発前夜には5万人にまでなった[5]。しかし，当初は部隊入隊後の訓練内容が確立しておらず，訓練は各部隊に任された。予備資格のメンバーたちは，入隊後，資格を取るための訓練を受けた。メンバーたちは，包帯の巻き方，副木の当て方，止血方法，ベッドメイキングの方法などを学び，分裂行進の練習を行い，担架運搬を練習した。部隊は，結成当初，財源問題とともに教育訓練のための講師もそろわず，人材不足にも悩まされ，辺鄙な地域では看護婦が講師となった。また，部隊に登録しているにも関わらず，訓練参加者が50%以下であったり，メンバーもやめるのは自由だと思っていた[6]。

一方，陸軍省も，元来，ボランタリー救護部隊は侵略に備えて作ったものであり，戦前の段階では当面の重要な軍事問題としての位置づけをしなかった。したがって，強力な指導も行われず，むしろ軍関係者のなかでは，「ボランタリー救護部隊は余りにも自発的であり，規律は余りにもなく，女性に余りにも大きな自由裁量が与えられている」[7] とみる者が多かった。正規の軍医療部隊の将校たちもボランタリー救護部隊は思慮の外にあった。ある将校は，「個人的には私は，女性が看護婦や婦長以外のどんな仕事も女性がすることは思慮のあることだとは思わない」[8] と言い，女性の活動を看護婦に限

定して，女性が指導的立場に立ったり看護以外の仕事をすることには反対していた。

赤十字社は，軍がボランタリー救護部隊に関する統一的かつ具体的な方針を持っていないのをみて，今後のボランタリー救護計画に関する説明と指導を求めたが，陸軍省は，1913年初頭，以下のような回答を行った。

> いついかなる場所なのか，戦闘の激しさや負傷者の数を予想することが不可能なように，いくつのボランタリー救護部隊が必要とされるのか，どこでいつ必要なのか，部隊を利用する最良の方法は何かを予想することも同様に不可能である。また，個々の部隊に明確な任務を割り当てるのも不可能である[9)]。

陸軍省は，明らかにボランタリー救護部隊の具体的な活用方法をこの時点では認識していなかった。1914年2月25日，ランカ州のソールズベリィで開催されたボランタリー救護部隊会議で，デボン州長官は，女性ボランタリー救護部隊メンバーの活動を病院内の看護のみに制限するよう主張した。

> 女性を戦場で活動させようなどという考えは，これを最後にきっぱりと終りにしよう。…ボランタリー救護部隊のメンバーは戦場での最初の救助者ではなく，建物の中の看護婦として活動するものだと理解して，最高水準の仕事をすべきである[10)]。

1909年に陸軍省がボランタリー救護部隊設立の計画を立ててから，すでに４年が経過しているにも関わらず，組織のあり方，訓練や教育，活動の内容はあいまいなままであった。このような状況を打開するために，陸軍省は，1914年６月，ボランタリー救護部隊の活動に関して審議をするための委員会を設立した。しかし，その2ヵ月後，第一次世界大戦が勃発し，ボランタリー救護部隊の活動は大きく変化を遂げていくことになる。

（2）戦争前の女性たちの自主的な訓練活動

陸軍省や赤十字社がボランタリー救護部隊の役割に関して模索している間にも，各地域では，部隊の女性たちを中心に，訓練活動を組織したり，講習会を開催したりしていた。エセックスやコーンウォールでは，バルカン戦争に救護隊メンバーとして参加した経験を持つ女性たちが赤十字支部のメンバーに講演を行った[11)]。ある応急救助隊長は，イギリス南部を回って部隊メンバーだけでなく一般人にも，200枚以上の図解入りスライドを見せながら応急処置の方法を説明した[12)]。活動のための資金集めにもメンバーは取り組み，ドーセットでは，女性ボランタリー救護部隊がガーデンセールを開き，おもちゃや菓子，飲み物を売り，ゲームをし，参加者とともに楽しみながら資金集めをした[13)]。ロウトンでは，赤十字支部のための資金集めコンサートが開催され，収益金は男性救護部隊メンバーのユニフォーム購入に利用された[14)]。

部隊のメンバーを募集することも支部や部隊の重要な活動であった。コールズヒルのボランタリー救護部隊は，メンバー募集のポスターを作成したが，そこには「イギリス赤十字社のボランタリー救護部隊に加入する意思のある活動的で愛国的男女を求む」とあり，人々の愛国的感情に訴えて部隊への参加を呼びかけた[15)]。

また，赤十字とボランタリー救護部隊への興味をひきつけ，メンバーを募集するために，ポスターだけでなくいろいろな工夫が凝らされた。リンドハーストでは，赤十字社と聖ヨハネ救急車協会が共同で「包帯巻き競技会」を開催

し，メンバーたちが包帯の巻き方の速さや正確さを競った。そのほかの地域でも野外の担架運搬訓練が行われたが，これも地域の人々への救護部隊の宣伝と加入をアピールするものであった[16]。

調理実習は，当初，応急処置や看護のように重要な活動とは思われていなかったが，ベドフォードカレッジのL.バーカー（Miss L.Barker）は料理教室を組織した。タイムズ紙が「愛国的コックー女性のための新しい戦時協力」という記事を掲載したのである。将来，傷病兵のために大量の食事が必要になるということを見越してのことであった。多くの家庭が，女性ボランタリー救護部隊メンバーのために台所の使用を申し出た。メンバーたちは，病人食の作り方や台所用品の保管方法，食材の扱い方などを学んだ[17]。この調理という領域は，戦争勃発後，ボランタリー救護部隊の重要な活動の一つになり，メンバーたちはコックとして活躍した。

戦前における女性救護部隊の多様な訓練や活動の中でも，キャンプは女性たちにとって忘れられない体験であった。初めての赤十字女性キャンプは，1911年６月にバリー島で開催され，1912年，1913年と続けて行われた。これは，E.P.ヒューズ（E.P.Hughes）の発案によるものであった。彼女は，グラモーガン赤十字将校協会名誉幹事であり，ヨセミテ渓谷でのキャンプ経験があったこと，兄が国防義勇軍大佐で同じくキャンプを経験していたことから，キャンプ生活の有効性をよく知っていた。彼女はキャンプ生活が，その経験を全く持たない女性たちに団体精神と規律を養うのに最適の場であると考えたのである。

ヒューズは赤十字誌に「グランモーガン州バリー島のキャンプ活動記録」[18] というこのキャンプの報告記を書いているが，それによると彼女は，バリー島の南端にある三棟のビルを州協会から借り，台所，講義室，食糧貯蔵庫，将校の部屋などを作った。参加者は年を追って増加し，初年度の1911年には30人から40人であったが，1912年には60人となり，１週目の最終日には90人にまで増加した。1913年には70人以上が参加し，週末には100人になった。当初から参加者は４つのグループに分類されていた。第１のグループは，10日間の全コースに参加する者で人数が最も多かった。第２のグループは人数は多くはなかったが，その地方のメンバーで，家で睡眠をとり，昼はキャンプで過ごした。第３のグループは，主に教師や郵便局員で，キャンプに泊まり，朝，自分たちの仕事に出かけていった。第４のグループは，時間的余裕のない女性たちで，１週目の金曜日の午後から月曜日の朝まで参加した。彼女たちは，寝袋を持参し，それにわらを入れて病院のテントで寝た。月曜日の朝，彼女たちが出かけた後，テントは病院になった。このグループ分けは，よく工夫されたといえるだろう。全コース昼夜を問わず参加しなければならないとしたら，多くの女性を参加させることはできなかったはずである。わずかの生活時間上の工夫でキャンプへの参加が可能なように計画されていた。参加者は，１日につき１シリング９ペンスを支払った。参加料は食料，テントや設備の賃貸料，印刷代，郵便料金などに使用された。女性たちは自ら財政の管理も行った。

なぜこれほどまでして女性たちはキャンプに参加したがったのか，その理由はいくつか考えられるが，まず第一に，キャンプでの経験は女性たちがこれまで携わってきた家事や毎日繰り返される同じ仕事とは異なっていた。寝袋にも

ぐりこんでテントで寝たり，担架運搬訓練をしたり，多人数の食事の用意をしたりする活動そのものが彼女たちには新鮮だった。

第二に，ほとんどの女性たちにとって，団体行動は生まれて初めての経験だった。規律に従って行動することを学び，互いに協力しあって一つのことを成し遂げることは，社会的な活動に参加する経験をほとんど持たなかった女性たちにとっては，大きな喜びであった。その中で，彼女たちは友情を育んだ[19]。

第三に，キャンプ生活は女性たちを健康にし，心を豊かにした。彼女たちは，「ハリエニシダ」の中を歩き，「ツチボタル」の輝きに目を見張り，「海」の音に耳をすませた。「キャンプでのコンサート」を楽しみ，嵐や雨に身を寄せ合い，「すばらしい夕日」を友と眺め，「わくわくする講義」を聴き，「燃えない焼却炉」にてこずった[20]。彼女たちは，数え切れないほどの興奮する出来事に遭遇した。

そして，最後に，これらの心の高揚を伴う行動が，人道と博愛を理念として掲げる世界的組織である赤十字社の一員としてのものであることを実感する時，それは，自分たちの中にある力への信頼ともなっていった。「ボランタリー救護部隊の訓練など必要ない」[21] という声にもくじけず，女性たちは単なる個人的な興味を超えて，この活動が何らかの貢献をするということを信じて訓練に励んだ。軍関係者は，キャンプの服務規定や日常の規則を興味深く見学し[22]，軍としてボランタリー救護部隊をどのように利用できるか推し量っていた。

1913年のキャンプでは，ヒューズは，キャンプでの訓練をより効果のあるものにするために政府と赤十字本部へ望みたいことはと聞かれて，次のように答えた。政府へは，①軍のテントを借りたい，②正規軍医療部隊の設備・備品を借りたい，③正規軍医療部隊の軍曹を指導者として送って欲しいという要請をした。赤十字本部へは，①キャンプの視察に来て欲しい，②キャンプでの実習を経験したメンバーにキャンプ証明書を発行して欲しい，③女性キャンプの取り組みは新しいものなので，今後数年間，自由に試験的にキャンプをすることを認めて欲しいというものであった[23]。ヒューズは，キャンプに必要な備品と指導者を要請し，キャンプの有効性の承認を求めた。皮肉にも，彼女の願いの多くは，実際の戦争の中で実現することになった。翌1914年，戦争の勃発に伴い，女性たちは訓練でなく現実にテントで寝起きし，軍医療部と共同行動をとり，キャンプで学んだことを生かす場を持った。

ほかにもキャンプを組織した女性たちがいた。ロンドン市ボランタリー救護部隊第10部隊の司令官であるL.デント夫人（Mrs, Lancelot Dent）もキャンプを開催した。赤十字誌1914年４月号に掲載された彼女の報告[24] のなかで，デント夫人は，キャンプでの午前７時から午後10時までの一日のスケジュールについて述べている。（表１参照）

女性ボランタリー救護部隊メンバーは，午前７時から午後10時までのスケジュールに従った生活のなかで，規律と団体生活を学んでいった。そして，講義のなかで教えられたように，その場にあるもので即興的に必要な物を作った。干草でベッドを作り，仮設病棟をたて，わらでロープを作った。病人食を作り，家事一般をこなした。医学や看護に関しては，正規看護婦のように専門的知識は教えられなかったが，戦闘地域近くで緊急の看護が必要となった時の訓練をメンバーたちは積んでいった。陸軍省が

表1　キャンプでの一日のスケジュール

スケジュール	時　刻	訓　練　内　容
朝礼	7.0a.m.	・訓練①――消防と担架運搬
朝食（作業着着用）	8.0a.m.	・訓練②――テントを建て手術室や病棟，台所を作る。干し草用荷車を用意する。野営地を確保し寝場所を作る。わらでロープを作ったり，袋にわらを詰めてベッドを作る。
ベッド整頓	8.45a.m.	
宿舎検査（司令官は毎日の報告を受ける）	9.0a.m.	
訓練①	9.30a.m.	・訓練③――（a）戦闘を想像した訓練。担架で負傷者を運搬し，病院へシグナルを送って患者の状況を知らせる。患者に温かい飲み物を提供し，仮の宿舎に運ぶ。（b）馬小屋を感染病棟に作り変える。正規軍医療部隊の軍曹が隔離と消毒に対処する。
解散	10.30a.m.	
訓練②	11.30a.m.	
解散	12.45p.m.	
昼食	1.0p.m.	
訓練③	2.30p.m.	
解散	4.15p.m.	
お茶の時間	4.30p.m.	
夕食（屋内用服装）	7.0（7.30）p.m.	＊お茶と夕食の間に，台所係と食糧係以外のメンバーには包帯の練習や他の訓練が入る。
消灯（会話中止）	10.0p.m.	

出所）Mrs.Lancelot Dent, “Hints on British Red Cross Detachment Camping”, *The Red Cross*, The British Red Cross Society, April 1914, pp. 125-126より，筆者作成。

ボランタリー救護部隊の具体的な活用方針を持たず，女性ボランタリー救護部隊メンバーの仕事を病院内の看護だけに限定することを論議していた頃，各地のボランタリー救護部隊は，陸軍省の意向とは関係なく，こうして自主的に訓練やキャンプ活動に取り組んでいた。

戦争前，女性たちが社会的に参加できた活動は，ボランタリー組織のための資金集めとその活動だけであり，「いまだかつて組織されたことのない女性たちは，自ら組織することを学んでいった」[25]。「ボランタリー救護部隊」計画が動きだし，部隊が設立されていくなかで，女性たちはそれまでの家事や，ボランタリー組織での資金集めと活動，キャンプの経験などの個人的体験をボランタリー救護部隊の訓練へと収斂させていった。

1914年８月１日には，男性ボランタリー救護部隊は543部隊2万3047名，女性部隊は1811部隊4万7196名にまでなっていた[26]。多数の女性たちの部隊加入とその後の訓練活動は，女性たちの主体的なエネルギーに支えられたものであった。

２．戦争の勃発とボランタリー救護部隊

（1）ボランタリー救護部隊の活動の広がり

1914年８月４日，イギリスは第一次世界大戦に参戦した。同年11月には，国土防衛のために一定の統制力を内閣に与える国土防衛法（Defence of the Realm Acts ）が制定されたが，

政治や産業はいわゆる「平常通りの業務」（Business as Usual）の方針に従って遂行された。しかし，軍と政府は，戦争に対応するためにボランタリー救護部隊に関する指示を出していった。戦前，政府は，ボランタリー救護部隊をどのように活用するか明確なイメージを持っていなかったが，戦争勃発と同時にその必要性と有効性を改めて認識したのである。政府は，８月６日にボランタリー救護部隊の腕章と資格証明に関して，13日にはボランタリー救護部隊の軍医療部関連機関における採用に関して，18日には私立病院や補助病院における部隊メンバーの採用に関してそれぞれ通達を出した。そして，８月23日には，軍評議会がボランタリー救護部隊に要請があるまで待機するように指示を出した[27]。

イギリスの参戦後，赤十字社は常任委員会[28]を毎日開催し，人事，備品，補助病院，回復期療養所の部門を設立し，活動を展開していった。早くも８月10日の執行委員会の決定に基づいて，エセックス支部のボランタリー救護部隊が動員され，ハリッチで看護活動に携わった[29]。戦争初期のボランタリー救護部隊の活動の中で最も重要なものの一つは，ボランタリー救護部隊のフランスへの派遣だった。ボランタリー救護部隊の計画作成時には，部隊はイギリス国内でのみ活動が予定されていたが，戦争の状況によって，赤十字と陸軍省は部隊を国外にも派遣することを決定した。

休息所の第一号をフランスのブローニュに設置するために部隊が初めて海外へ派遣されたのは，イギリスが参戦してたった２ヶ月後のことであった。1914年10月16日，２つの部隊，ロンドン第128部隊とロンドン第146部隊から16人のメンバーと２人の正規看護婦がフランスでの活動のために召集され，司令官ファース夫人はこのボランタリー救護部隊を率いてパリに向かった。フランス到着後，部隊は兵士のための適当な宿舎を見つけることができず，10月26日，３台のフランス製ワゴンと２台の乗客用馬車を，薬局，台所，倉庫，宿泊用の部屋に作り変えた。部隊のメンバーは，常に設備や備品のないところでいかに即興的に手近にある物で必要品を作り出すか訓練を受けていたが，現実の場でこの訓練は非常に役立った。馬車の改造後，24時間以内に1000人，11月２日には2300人もの負傷者に食事を提供し，ワゴンではボランタリー救護部隊の看護婦たちが，緊急に召集された２人の医者と３人の正規看護婦とともに，200人の兵士に手当てを施した。そして，人手不足を補充するためにボランタリー救護部隊東ランカ州第19部隊から８人の雑役夫が派遣された。赤十字社は，軍に石炭，照明具，医療備品，食糧を要請した。部隊の仕事は傷病兵の看護だけではなく多岐にわたり，３ヶ月間にこの部隊は次のような活動を行った。

①3万8000人の傷病兵に，スープ，ココア，パンとバター，ハム，チーズ，チョコレート，リンゴ，バナナなどの食料を提供。

②看護婦たちによる550の医療及び外科の症例の処置。

③病院へ傷病兵を送迎するための救急車による600回の出動。

④メンバーや友人たちによって集められた5000におよぶクリスマスプレゼントを病院や救急列車に配布。

⑤列車で運ばれた８万のタバコを兵士に支給。

⑥数千部におよぶ新聞や雑誌の配布。

⑦ボランタリー救護部隊メンバーによる砂袋

や包帯，その他の物品を病院のために作製。

⑧休息所に宿泊した350人の病人の世話[30]。

海外派遣第一号のボランタリー救護部隊は，わずかの人数でこれだけの仕事を成し遂げ，その有効性を赤十字社のみでなく，軍にも印象づけた。ボランタリー救護部隊メンバーは，傷病者の医療的処置や一時的休息の提供以外に，チョコレートやタバコなどの嗜好品，新聞などを兵士に配り，包帯などの必需品を作った。軍医療部隊ができることは病気や怪我を治すことだけであり，これらのことは，赤十字だけに可能なことであった。そして，「かわいく元気なボランタリー救護部隊の看護メンバーは，看護の知識を持ち，効率よく抑制された感情で毅然と働く正規看護婦と対比された」[31]。単に医療の補助だけでなく，傷病兵を慰め穏やかな雰囲気を作ること，これもボランタリー救護部隊看護婦が結果として果たすことになった役割のひとつであった。

フランスへのこのボランタリー救護部隊の派遣が，「海外におけるボランタリー救護部隊の活動を中心とする赤十字活動の多様な発展へつながっていき」[32]，女性ボランタリー救護部隊メンバーは，イギリス軍が駐屯している他国にいる傷病兵にとって，故国の思い出をよみがえらせ，心をなぐさめるものとなった。

（2）女性の職場進出とボランタリー救護部隊

戦争は短期で終わると思われていたが，1915年に入って，戦争は総力戦の様相を見せ始めた。戦争の長期化の見通しにたって政府は「労働稀釈」（dilution）政策をとり，女性や若者などをこれまで男性の職場であったところへ投入することを計画した。赤十字誌も，政府の「労働稀釈」政策と呼応して，女性の職業として多様な分野を紹介し，女性の職場参加を訴えた。

スタフォード州病院長は，男性の医師不足のため，３人の女性医師を任命したが，これは画期的なことであった。ケンブリッジの外科教授は，「戦争勃発以来，医師不足である。男子医学生は医師にならずに司令官になって戦争に行ってしまう[33]。今や，資格のある女性医師がサービスを提供できる多くの分野がある。例えば，公衆衛生，女性と児童のための病院，大きな総合病院の婦人科，外国での活動，一般的な業務などである」と医学の分野への女性の参加を奨励した。そして，グラスゴーに女性のための医学学校ができ，アイルランドの６つの学校とカーデフの南ウェールズ大学でも女性が医師となるための勉強ができるようになり，社会的にも女性の職場進出を奨励し，それを制度化する方向へと動きだした[34]。

女性の進出が求められたのは，医師の職業だけではなかった。建築，歯科医，薬剤師，教師，家政学，学校出席調査官，寄宿舎学校の監督官や婦長，児童ケア委員会アシスタント，職業安定所職員，女性健康保険職員，ソーシャルワーカー，農業，酪農業，園芸，森林や山林の管理者，料理，ティールーム経営，服飾，看護婦，保母，洗濯業，室内装飾，製本，金属労働者，宝石，化学者，花屋，写真家，語学のできる手紙の検閲係，切符売り場と改札係とほとんどの職業で女性が求められた。そして，実際に女性たちはこれらの労働現場に進出し，最も保守的だといわれたロンドンの銀行も女性を雇用し始めた[35]。

しかし，労働組合は，女性が雇用されることにより，賃金の抑制，雇用条件の悪化，仕事への尊敬の念の喪失などを懸念し，戦争から帰っ

てきたときには，現在と同じ条件下での雇用を要求した。男性労働者の目には，次々に自分たちの職場に参入してくる女性たちが男性の仕事を脅かすものとして写ったのである。

人手不足は看護の領域で最も深刻であった。イギリス国内の看護婦だけでは足りず，1915年，イギリス自治領のオーストラリアから60人から80人，南アフリカから30人，カナダから60人の看護婦が招集されたが，不十分であった。看護婦不足にも関わらず，海外の病院からは看護婦の派遣要請が相次いだ。1915年５月，フランスの軍病院から初めての看護婦派遣要請に続き，マルタ，エジプトからそれぞれ200人の看護婦派遣の要請があり，ボランタリー救護部隊メンバーは，海外へと出かけていった[36]。

陸軍省は，軍病院の増設とそれに伴う看護婦の増員をはかることを決定し，ボランタリー救護部隊から国内外の軍病院で働く看護婦を採用する条件を1915年２月１日，提案した。それによると，条件は，①家庭看護と応急処置の資格と推薦状の保持，②採用されれば，正規看護婦の指導のもとで働き，将校と病院の婦長の直接管理下に置かれる，③年齢は，23歳から38歳まで，④軍病院の看護スタッフのための宿舎に住むこと，⑤軍病院の時間割と規則に従うこと，⑥勤務中は洗濯したユニフォームを着用，⑦１ヶ月の見習い期間終了後，推薦があれば，１年または戦争中の勤務が可能，⑧不適切な行動があれば，契約は解除される，というものであった。続いて２月19日，陸軍省は正規看護婦の年40ポンドを参考に，ボランタリー救護部隊メンバーには年20ポンドの手当て，ユニフォーム用として３ヶ月ごとに１ポンド，それに宿舎，食事と洗濯費用も支給することを決定した[37]。

こうして，ボランタリー救護部隊メンバーは，看護婦不足を補う要員として完全に軍病院の体制に組み入れられた。そして，彼女たちは，当初のボランタリー，すなわち無給の働き手から有給の働き手へと位置づけられていった。看護婦不足は深刻で，もはやボランタリーな働き手だけに頼ることはできなくなり，有給にすることにより，陸軍省はより多くのボランタリー救護部隊の女性メンバーを集めようとした。

1915年３月27日には，ボランタリー救護部隊メンバーの仕事の範囲を洗濯婦，タイピスト，マッサージ師（男女）に拡大するための規則が軍長官から出された。同時に，18歳から36歳までの男性は，兵士になれない正当な理由がなければ，ボランタリー救護部隊に加入できないことも決定された[38]。1915年のまだ徴兵制がひかれていない段階でも，兵士募集のキャンペーンに多数の男性が応えていったが，軍長官のこの決定は，健康な男性をすべて兵士とする意図から出たものであった。イギリス中の男性が戦場へと出かけ，女性が男性のいなくなった職場へ進出していった。女性ボランタリー救護部隊の仕事の範囲が看護だけでなく，他の分野にまで拡大されたのもイギリス全体のこのような状況の反映だった。

３．ボランタリー救護部隊の軍隊化

（1）戦争遂行策に組み込まれていくボランタリー救護部隊

ロンドン空襲も始まり，戦争が長期化する様相を見せるなか，1915年５月25日，自由党内閣に代わってアスキスを首相とする連立内閣が誕生した。「平常通りの業務」は，「戦争体制の

確立」にとって代わられた。

連立内閣は，軍需省を新設し，軍需工場を管轄下に置き，軍需産業におけるストライキを禁止した。1915年７月には「国民登録法」を制定し，16歳から65歳のすべての男女の職業等の登録を義務付けた。1916年１月には，18歳から41歳までの独身男性対象の徴兵制を導入した。もはや，個人の自由意志によるボランタリーな兵士だけでは，政府や陸軍省の戦争政策には間に合わなくなっていた。戦争勃発後，1914年9月までの２ヶ月たらずの間に75万人，1916年１月までに約240万人が入隊し，戦前の兵士の約10倍となっていたが[39]，陸軍省はもっと多くの兵士を必要としていた。政府は，個人の生活と自由意志への国家の介入を退けてきたこれまでの方針を大きく変え，国家をあげて戦争遂行体制を作りあげようとした。一定の自由と主体的な活動を特徴としてきたボランタリー救護部隊も国家の戦争体制が確立するなかで，徐々にその自由さを失っていき，ボランタリー救護部隊メンバーの行動も厳しく統一されていった。

1915年７月，赤十字社は病院で勤務するボランタリー救護部隊メンバーへ勤務態度に関する以下のような規則の遵守を指示した。

＊ユニフォームはいつも清潔にしておくこと。エプロンは上着より短く，首までの襟をつけ，個性を出さないこと。低いゴム靴を履くこと。はさみ，安全ピン，鉛筆またはペンを常時携帯すること。つめをのばさないこと。化粧・香水・宝石の禁止。うがいをすること。夜はよく寝て，新鮮な空気を吸い，適当な運動をすること。１日に１回は小さい歯の櫛で髪をとくこと。

＊礼儀作法

①医師，婦長，シスターまたはほかの誰であれ，上級の者が病棟に入ってきたら気をつけの姿勢で立たねばならない。そして，「サー」「婦長」「シスター」「司令官」「補給将校係」と呼ばなければならない。

②どこであっても部隊の上級者に会った時には，ユニフォームを着ているときと同様の態度で彼らに接しなければならない。それは，個人に敬意を払うというより組織への敬意である。

③求められたことには，どんなことでも疑義をはさまず，進んで迅速に遂行する心構えが必要である。もし，国を助けたいと思うならば，最も必要とされているところで最も緊急に求められていることを，惜しみなく自己を捨てて行うべきである。メンバーは非常に大きな組織の一部であり，注意深く行動することの重要性を認識していなければならない。

④メンバーは互いに礼儀と配慮を示すべきである。ゴシップは避けなければならない。というのも，それは，一緒に働いているメンバーを不幸にするからである。

⑤また，休暇中にメンバーの病院での働きぶりやスタッフについて噂話をするのも避けるべきである。

⑥給料，報酬，宿舎について質問がある場合は，シスターを通して婦長に問い合わせるべきである。

⑦婦長の許可なく配置された病院を離れてはならない。

⑧病院のあらゆる規則は厳守されなければならない。我々は，メンバーが真に規律の精神を持っていること，どんな誘惑にも耐えることを証明できることを期待している。こうして，イギリスが必要とする時に，惜しみなく名誉をかけて，国を助ける女性たちに依拠できるのだということをメンバーは示すだろう[40]。

この規則は，ボランタリー救護部隊メンバーが軍の上下関係や規律を身につけることを求めたものであった。こうしてボランタリー救護部隊は軍の体制に組み込まれ，J.F.ハチンソン（John F. Huchinson）のいう「ボランタリー組織の軍隊化」[41]が進んでいった。1915年９

月７日，ボランタリー救護部隊にとって重要な転機となる提案を陸軍省は行った。その提案とは，国内の病院で働く男性に代わって女性を登用し，男性を国内外のほかの医療活動に携わせるというものであった。９月13日に，そのための人員配置を管理する「ボランタリー救護部隊総合サービス部」の設置が決定された。この決定に基づき，1915年に軍病院で働く350人の男性の移動を皮切りに，1919年の春までに１万1000人の男性が病院を離れ，戦地勤務につき，ボランタリー救護部隊総合サービス部メンバーがその後を引き継いだ。

男性に代わって女性たちは，速記係，事務員，運転手，薬剤師，研究所所員，放射線技師助手，歯科医助手，電話交換手，調理人，店員，ウェイトレス，家政婦，洗濯婦，病棟手伝いなどの仕事についた。女性たちは，司令官，部隊監督官，補給係将校，総合サービス監督官のような管理的仕事にも任命された。1917年10月には，女性の適任者を選抜して派遣するための選考委員会が設立され，委員会は，イギリスの軍病院だけでなく，海軍療養所そして海外にも女性たちを派遣した。1917年10月にフランスへ，1918年５月にはサロニカへ，８月にはイタリアへと女性たちは出かけていった[42]。

戦時合同委員会の部門の一つとして女性委員会が設立され，K.ファース（Katharine Furse）が議長として選出された。ファースは同時に，女性ボランタリー救護部隊最高司令官として任命された[43]。ファースは司令官として女性メンバーに多くのアピールを出し，女性を励ますとともに，女性が男性に負けない仕事ができる存在であることを社会に訴えていった。

（２）ボランタリー救護部隊メンバーに求められたもの

戦争が激しさを増すなか，女性ボランタリ救護部隊メンバーへのアピールが，1916年春ごろから頻繁に出されるようになった。まず，赤十字誌1916年５月号に，ファースの以下のようなアピールが掲載された。

> …戦争はしばらくの間，続くでしょう。戦後，ボランタリー救護部隊メンバーは世界を再び秩序あるものにするために働かなければなりません。そのために，常に技術を磨き続けることが必要です。自己犠牲の精神で，料理やマッサージやタイプや薬の調合や大工や裁縫や運転などあらゆることをできる限り習得しましょう。幼い鳥のようにただ口をあけてエサを待つようなことはやめましょう。…時々，陸軍省は，たった24時間前に仕事を要請することがありますが，今は，帝国が戦争状態にあるのだから，理解しなければなりません。
>
> 兵士を元気づけ，寛大になるように。単に，「看護」することだけに満足してはいけません。必要なことは何でもしましょう。たった，三つのことだけを考えて。それは，①傷病兵の利益，②何でもしようとする意思，③王と国家に対する忠誠です[44]。

ファースは，王と国家への忠誠のために，あらゆる仕事を主体的に行うことを女性たちに訴えている。ボランタリー救護部隊メンバーとして活動した女性たちが，戦後も「世界を再び秩序あるものにするために働く」と見通していたファースは，また，女性が男性と同様に国家に貢献しうると信じ，女性たちにそれを求めた。1916年６月７日には，ファースは，ユニフォームの細かい規則を「ボランタリー救護部隊メンバーへのアピール」として出した。

> …ボランタリー救護部隊のユニフォームは，我々

の組織を象徴しています。それはあたかも「連隊の軍旗」（Colours of a Regiment）であり，我々の誇りを表すものであり，名誉を勝ち取るためのものです[45]。

ここでは，ファースはボランタリー救護部隊に軍隊のイメージを重ねている。そして，ユニフォームの細部にわたって注意を払うよう訴えた。例えば，帽子のリボンは左側にくるようにすること，襟は首が隠れる長さであること，イヤリングはしないこと，ハイヒールや留め金のない靴は履かないこと，ユニフォームは清潔にし，肩章は良く磨いておくことなどであった。そして最後に次のように訴えた。

ユニフォームに身を包み，それに名誉を与えなさい。そして，最大のそして最良の戦争のための女性の働き手，すなわち，ボランタリー救護部隊の一員であることに誇りを持ちなさい。

キャサリン・ファース[46]

ユニフォームは，ボランタリー救護部隊のメンバーであることの誇りを体現したものであった。ファースは，また，赤十字誌1916年10月号に，「ボランタリー救護部隊メンバーの義務と規律」について書いた。

…男性は危険なだけでなく，肉体的にも困難な状況，すなわち，泥や湿気や寄生虫，寒さ，熱，何日も同じ服，長期間風呂に入れないような条件下で国のために働いています。男性の陸軍や海軍に匹敵するボランタリー救護部隊の女性は，これに対して本当に「義務と規律」について考えているでしょうか？例えば，喫煙です。女性にはペナルティも何もありません。①女性としての義務の意味を考え，すべての時間を捧げよう。②規律を受け入れよう。③ボランタリー救護部隊のメンバーは，戦争に男性と同様に貢献できるということを示そう。これらを理解しないことは，国と傷病兵に対してだけでなく，女性という性に対する義務を怠ることになります。もはや個人ではなく，その力を求めている大きな全体の一つの原子であることを認識しなくてはなりません。メンバーは忍耐強く，規則に従い国内外で活動しています。彼女たちによって[ボランタリー救護部隊は]不滅の名を獲得しました。多くの批判に晒されながら，今では，婦長や正規看護婦は，我々なしでは彼女たちが仕事ができなかったと認めています。最初は克服できないようにみえていた困難に打ち勝ち，無私の献身によって獲得できたものです。この戦争では，女性ができる無限の領域があるのです[47]。

ファースは，ボランタリー救護部隊の女性が，「陸軍や海軍の男性に匹敵する」と考え，戦場で悲惨な状況下で戦っている兵士と同様の貢献を女性に求め，同時に，ボランタリー救護部隊の存在意義をことあるごとに訴えようとした。

そして，ボランタリー救護部隊メンバーに求められる資質としてファースは，「寛容さ」「利他的であること」「安定性」「快活さ」「適応性」をあげた[48]。ファースは戦争遂行という目的のために頻繁にメンバーにアピールを出したが，それは同時に女性の力を引き出し，社会に女性の価値を認めさせようとするものであった。ファースの指摘した資質や，規律と義務の理解とそれに基づく行動は，中流階級からきたボランタリー救護部隊メンバーにとっては新たな体験であったと同時に，戦後の女性の活躍を準備するものでもあった。

こうしてボランタリー救護部隊の活動が軍隊化し，規律あるものになっていくにつれ，メンバーの活動場所とその勤務条件，活動内容が整理されていった。（表２参照）

ボランタリー救護部隊メンバーの活動は，活動場所やその内容によって有給か無給か異なった。メンバーは陸軍または海軍病院，総合サー

表2　ボランタリー救護部隊メンバーの派遣場所と活動内容および労働条件

派　遣　先	給　料	活動内容および労働条件
陸軍（海軍）病院	有　給	・任命された日から陸軍（海軍）省の管理下に入る。 ・看護婦――ボランタリー救護部隊メンバーは正規看護婦のもとで働く。 ・総合サービスメンバー――病院内の男性の仕事の代替。 ・年齢21歳－48歳。 ・腸熱の予防接種必要。 ・１ヶ月の見習い期間後，認められれば６ヶ月の契約。さらに６ヶ月または停戦まで延長可能。陸軍省婦長長官か海軍医療長官によって契約はいつでも解除される。 ・最初の１年間20ポンド支給。２期目の６ヶ月以降，30ポンドまで半期ごとに増額。 ・（a）病院からほかの病院へ（b）国内から海外へ（c）病院から病院船へ，陸軍省の婦長長官（または婦長）の決定によって移動が要請される。 ・メンバーは看護婦宿舎に住み，婦長の管轄下に置かれる。 ・１年につき５ポンドの手当て。宿舎，食料，洗濯，旅費は支給。 ・休暇は最初の６ヶ月は７日。２期目の６ヶ月に14日。
補助病院	無　給	・２週間の見習い期間。３ヶ月の契約。 ・交通費，食事，宿舎，洗濯手当ては病院当局から支給。 ・年齢制限ゆるやか。小規模な補助病院で働くのを好んだメンバーもいた。また，兵士たちも家庭的な小病院を好んだ。
海外（フランス，マルタ，サロニカ，エジプト，イタリア，コンスタンチノープル，スイス，オランダ）	基本的に無給（合同委員会との契約）	・食事，宿舎，洗濯，ユニフォームなどの必要経費は支給。 ・年齢は19－25歳。 ・ボランタリー救護部隊の任命した将校の管理下に入る。 ・運転手には手当てが出る。 ・活動場所と内容――①軍駐屯地での飲料，医薬品の提供②救急車の出動③看護婦用クラブ（看護婦のための休憩室）の運営④休息所での介護，地方の人々の病気や事故にも対応⑤自動車部隊⑥負傷兵の家族のための宿泊所⑦合同委員会事務所。
その他の国内での活動	無　給	・メンバーのための食堂オープン（1917年）。 ・メンバーのためのホステルオープン（1917年，1918年）。 ・メンバーのための療養所オープン。 ・メンバーのためのクラブオープン（休憩室，読書室など）。 ・空襲部隊設立装備一式，ヘルメット，水筒供給。救急車準備。

出所）The Imperial War Museum＜Microform＞, Reel, No. 31.（London: Harvester Press Microform Publications LTD, 1985）およびThe Joint War Committee, *Reports*（London: HMSO, 1921）より，筆者作成。

ビス部など自分の活動したい分野に応募し，選考委員会によって派遣先が決定された。看護のボランティアを希望しても総合サービス部にいくように要請されることもあった。最終的には本人の意志で活動場所は決まったが，空きがない場合はほかの仕事を紹介された。活動先が決まれば，軍または合同委員会と契約書を交わし，メンバーはそれぞれの場所に散っていった。

1916年９月の時点で，女性ボランタリー救護部隊メンバーは８万人を数え，そのうち約１万2000人が軍病院で正規看護婦とともに働き，その上，約４万人がフルタイムもしくはパートタイムで補助病院やボランタリー救護病院で働いていた[49]。ボランタリー救護部隊メンバーの中には，「ボランタリー」という名称にも関わらず，契約書にサインをし，給料をもらい，軍の規律に従って活動する者が生まれることに疑問を抱く者もいた[50]。これに対して赤十字社は，「ボランタリー救護部隊は平和な時代に作られたものであり，戦争というこの危機の時代に要請されて軍病院に行ったのである。軍病院では軍の規律に従うのは当然のことであるが，かといって，ボランタリー救護部隊をやめる必要はない」[51] と回答した。赤十字社は，ボランタリー救護部隊のメンバーであることと，派遣された場所によって有給となることは矛盾しないという立場をとった。

1913年当時，軍はボランタリー救護部隊の具体的な活用方針を持っていなかったが，戦争のなかで次第にボランタリー救護部隊に大きく依存するようになっていった。しかし，軍は，ボランタリー救護部隊の利用の方法について固定した方針や原則を持っていたわけではなく，その場その場で利用方法を見出していった。したがって，軍は，ボランタリー救護部隊設立計画作成当初は軍医療部の補完役としての看護を部隊に期待していたが，男性が職場を去っていくなか，多種多様な仕事に従事することを求めた。補充や穴埋めは，必要なときには求められるが，充足している時には不必要である。そこにボランタリー組織からのボランタリーな意志で参加した要員であることの必然性があった。ボランタリーであるが故に有給・無給に関わらず，採用不採用は軍や赤十字社の自由であった。

ボランタリー救護部隊の活用は，軍と赤十字社との緊密な協力関係の下に行われた。軍は赤十字社にどんな仕事に何人のメンバーが必要かを要請し，赤十字社は軍の依頼に応えて要員を送った。ボランタリー救護部隊メンバーの「規律と義務」についても，ユニフォームについても，全女性へのボランタリー救護部隊加入についても，赤十字社が常にアピールを行った。赤十字は女性の戦争参加の窓口であった。女性ボランタリー救護部隊最高司令官のファースは，赤十字を通じて「犠牲，忠誠，献身が赤十字活動のすべてです。ボランタリー救護部隊メンバーの優れた行為が，軍当局に軍隊の仕事の新しい分野に女性を雇用する勇気を与えました。あなた方の仕事は国家への奉仕です。すべての人にこの伝統，名称，我々の勇気を知って欲しいのです」[52] と女性たちにボランタリー救護部隊への加入と活動への参加を呼びかけ，軍当局に女性の力を認識させようとした。

ファースのいう「犠牲，忠誠，献身」は，国家に対してであった。ボランタリー救護部隊のメンバーの採用が決定され，契約が交わされる時の14項目からなる契約条件[53] のなかに「勤務期間」や「報酬」とともに「イギリス国民であり，王に忠誠を尽くすことを宣言する」という１項目が入っていた。ボランタリー救護部隊

の活動とは，傷病兵救護をはじめとして戦争遂行のために必要なあらゆる仕事を行うことであり，その活動を通じて国家と王への忠誠を示すことであった。赤十字の行動原則であるジュネーブ条約やアンリ・デュナンの理念よりはむしろ，国家への奉仕が強調された。

ファースはまた，海外で活動するメンバーについて次のように語っている。「彼女たちによって成し遂げられた最大のことは，疲れ，傷つき，嘆いている人々に対する彼女たちの存在そのものが与えた心理的効果だと思います。イギリスの女性たちは，全力で自分たちのなすべきことを行ったのです。彼女たちは，疲労困憊し，孤独で援助を必要とする人々のために『そこ』にいて，あらゆる困難と孤独に直面することを決心したのです。これらの女性たちのことを忘れてはなりません」[54]。

ファースは，女性が男性と同様に国家に貢献できるということをボランタリー救護部隊の活動を通して証明しようとしてきたが，女性独自の有効性にも気付いていた。男性でもなく，正規看護婦でもないボランタリーな意志で海外に行った女性たちの存在自体が，兵士たちに与えた安らぎと勇気を知っていた。これは，ボランタリー救護部隊が行った具体的な活動とともに，その存在そのものが持っていた価値であった。

４．ボランタリー救護部隊メンバーの体験

（1）戦争の実態と過酷な労働

ボランタリー救護部隊のメンバーは，メンバー自身の日記や詩の中に活動や生活の詳細と戦争の姿を記述している。E.B.ペンバートン（E.B.Pemberton）は，フランスでボランタリー救護部隊メンバーとして1914年から1917年にかけて活動した女性である。彼女は，休息所に運び込まれる兵士たちの世話，看護婦のための療養所の管理，救急車部隊の補給係などの活動を，３年間にわたって行った。その間，両親に大量の手紙を送り活動の内容を報告した。

ペンバートンは，フランスのブローニュの休息所で働いた時には午前８時45分の勤務開始に間に合うように８時30分に宿舎を出て，帰ってくるのがほとんど午後９時になること，毎日２時間の休憩時間があったのが忙しくなって１時間になったことを両親に報告している。そして，運び込まれる兵士たちが休息所で過ごすわずかの時間をいかに大切に思っているかを記した。

> …兵士たちは，タバコをすったり，本を読んだり，おしゃべりをしたりして数時間を楽しみ，去っていきます。彼らに楽しい時間を提供する助けができたという思いを私たちに残して。…兵士たちは，時間が許すならば話をしたり，冗談を言ったりすることが大好きでした。彼らは，同じ兵士であれ，医者であれ，看護婦であれ，とにかく，どんな人でも歓迎します。誰かと話すことは変化をもたらし，休息にもなるのです。もちろん，人々から彼らに提供されたちょっとしたものも彼らに配られます。昨日，一人の兵士が私に握手させてくれと言い張るのです。彼が言うには，ずっと欲しかったチョコレート一切れをついに手に入れることができたお礼がしたいというのです[55]。

クリスマスには，ボランタリー救護部隊によって集められた資金で，プレゼントが兵士たちのために配られた。その中には，筆記用具，カード，ペンナイフ，マッチ箱，お楽しみ袋，安全かみそり，石鹸，チョコレート，ドミノ，ハーモニカ，カレンダー，本などが含まれていた[56]。フランス北部のアヴァヴィルの休息所に移動したペンバートンは，多数の兵士たちの介護を行

表３　ペンバートンたちが介護した兵士の数とその内容

1915年9月28日		1915年9月29日	
時刻	兵士への介護	時刻	兵士への介護
7.45	989人に食事とタバコ。	6.00	715人食事。
8.50	90人に包帯，３人を避難させる。	7.00	100人に包帯。
13.15	840人に食事とタバコ，４人を避難，50人に包帯。		（この間，物資の調達や事故による出動などの活動）
21.00	1030人に食事。31人を残し列車で移動。		1233人に食事。３人避難。
		1.50	140人に包帯。
23.55	150人に包帯。		
23.55	999人に食事。		
1.30	２人避難，150人に包帯。		

出所：Eleonora B. Pemberton, “Letters from France December 19, 1914”, The Imperial War Museum ＜Collection＞ 85/33/1より筆者作成.

った。手紙のなかの介護の内容をまとめると次の表のようになる。（表３参照）手紙では，何人のボランタリー救護部隊メンバーとともにこれらの活動を行ったのか書かれていないが，一日にいかに多くの兵士たちの介護をしたのかがわかる。

ボランタリー救護部隊メンバーの勤務状況は，当初，1914年にペンバートンがフランスに行った頃には，８時45分が始業開始，また，休憩時間もはじめは２時間，後に１時間あったが，1915年になると傷病兵が一挙に増大し，メンバーの勤務時間もペンバートンが記しているように長時間になっていった。28日と29日のたった2日間で，のべ5806人に食事を与え，680人に包帯を巻き，12人を避難させた。第一次世界大戦では多数の死傷者が出たが，それは，毒ガス，戦車，航空機が登場し，大量の殺戮が行われたことの結果であった。ボランタリー救護部隊メンバーたちは，寝食を忘れて兵士の介護にあたった。

（２）中流階級出身のボランタリー救護部隊メンバー

M. ウォレン（Margaret Warren）も，ボランタリー救護部隊看護婦として第2ロンドン総合病院で傷病兵の看護にあたったが，彼女はボランタリー救護部隊のメンバーになった中流階級出身の女性のひとりであった。ワレンはどのようにしてボランタリー救護部隊メンバーになったのか，インタビューに答えて次のように証言している。

> …あの頃，戦争の可能性や何かするべきだと考えていた人もいたけれど，私は，パーティーや楽しいことにあふれたすばらしい生活を送っていました。よく,テニスパーティーをしたのですが，もし何かしなければいけないとしたら何ができるか論議しました。私は，看護婦になること意外思いつきませんでした。戦争が起こりそうになって，私はいろんな講習に出かけました。そして，応急処置と家庭看護のコースを取りました。母は私が看護婦になるのに大反対でした。私たちより低い階級の兵士を看護するということに反対だったのです[57]。

戦争が起こった時に，何かをしたいと考えた中流階級の女性たちにとって，ボランタリー救護部隊の看護婦になるということが，最も選択しやすいことだった。母親の反対を押し切ってワレンは看護婦になったが，そこで知った戦争の実態はパーティーやテニスに明け暮れていた生活からは想像もつかないものだった。

…運び込まれた時，兵士たちはしばしばショック状態でした。塹壕から運び込まれた兵士は非常に汚れていました。たぶん，非常な苦痛に見舞われていたと思います。兵士たちはたいていの場合，銃撃による怪我かガスにやられていました。ガス中毒の場合，気管支だけでなく，精神的にも特有の症状がありました。まともでいい人だと思っていると次の日はぴりぴりしているのです。たぶん，自分が良くなっているように思えなかったのかも知れません。

…彼らは回復するにつれ，連れて行かれると知っていました。［戦場に戻りたくないのか］何度も包帯の下に半ペニー銅貨が置かれていました。そうするとまた，壊疽になる可能性があったのです。彼らが塹壕に戻りたくないということに気づきましたし，それはとても理解のできることでした[58]。

「王と国家のために」，主体的にボランタリー救護部隊に参加した女性たちは，傷病兵救護を始めとして戦争のためにあらゆる領域で活躍した。それまで，社会的活動に参加する機会をほとんど持たず，「熱望の息の根を止められていた」[59] 女性たちは，戦時の熱狂に自らの閉じ込められた情熱を注いでいった。「非軍国主義者」を自認していた作家であり詩人でもあったV・ブリティン（Vera M.Brittain）でさえ，戦争勃発時，愛国的感情を捨てることはできなかった。彼女もボランタリー救護部隊に加入し，看護婦としてロンドン,マルタ，フランスで傷病兵救護の活動に参加した。しかし，ブリティンも，戦争の真実の姿を知る中で戦争に対する考えを変えていく。戦争が進むにつれ彼女の詩は現実に沿って変化していった。1915年８月，セント・パンクラス駅で「あなたは行ってしまった」と，戦場に向かう愛する者への惜別の思いを書いたブリティンは，1916年，自らが働く第一ロンドン総合病院での兵士たちの様子を次のように描写した。

赤い血潮の中で生まれ漂っている一塊の人間の残骸
ある者は二度と嵐の海に勇敢に立ち向かうこともなく丁重に傍らに置かれ
ある者は健康を回復し遠く広いかなたへと愛を胸に再び船出する[60]

戦争で弟や婚約者を失ったブリティンは，個人的感情としては戦争に決して積極的賛成を唱えたわけではないが，この詩には明確な反戦の意思表示はない。しかし，1917年６月には戦争の中で疲弊していく精神を次のように詠った。

私はもう疲れきった
血のように赤い太陽が西に消えていこうとしている
すべての窓が金色に輝き燃えている
私が愛したすべてのもの，最良のものは消えてしまった
私が望んだ幸福は去っていった
空っぽの希望のない探求だけが残された
私があこがれた最上のものも残りのものとともに消え失せた
私はもう疲れきった[61]

長引く戦争の中で肉親や友人を失ったのは，ブリティン一人ではなかった。ほとんどのボランタリー救護部隊のメンバーも家族や友人を失い，彼女たちは同じ思いを共有した。ボランタ

リー救護部隊のメンバー自身が犠牲になる場合も少なくなく，爆撃，事故，結核，流感などでメンバーは死亡した。メンバーの棺はユニオンジャックで覆われ，部隊のラッパ手が「消灯ラッパ」を吹き，牧師が埋葬の祈りを捧げた[62]。ボランタリー救護部隊メンバーは，兵士のように扱われた。

戦争が終わった翌年の1919年，ブリティンはオックスフォードに戻ったが，彼女を迎えたのは人々の無関心であった。帰還兵士が英雄扱いされるのとは異なり，戦時中，戦争のために働いた女性たちのことは話題に上らなかった。ブリティンは，「ただ帰り，もう一度最初からはじめなければならなかった」[63] と書き，彼女の看護婦としての戦争経験の意味について考え苦しんだ。しかし，ブリティンのいうように女性たちは，「もう一度,最初からはじめなければならなかった」が，女性を取り巻く状況はすでに戦前とは劇的に異なっていた。戦後，ボランタリー救護部隊メンバーのある者は平和主義者となり，ある者は「王と国家のために」活動したことを誇りに思い，ある者は生活の困窮と戦い, メンバーたちはさまざまな戦後を生きたが, ボランタリー救護部隊の活動の中で学び身につけた知識，技術，規律，勤勉さ，管理能力は，女性の中に確実に根を下ろした。女性たちはボランタリー救護活動の中で身につけたことを戦後の社会の中で生かすために戦争末期からその準備を始め，社会的評価を得ていった。

当初は，病院の婦長たちも必ずしもボランタリー救護部隊のメンバーを歓迎していたわけではなかったが，次第にその認識を変え，メンバーたちの仕事ぶりを次のように語る婦長も現れるほどであった。

> 彼女たちの病棟での積極的で親切な態度，些細な仕事にも進んでしようとする意思，私たちの彼女たちへのささやかな援助に対する感謝，これらは最も励みになるものでした。少し前まで彼女たちに対する批判を聞きましたが，彼女たちがいかに優秀かを知ることは嬉しい驚きでした[64]。

このような婦長からのボランタリー救護部隊メンバーへの高い評価は数多くあった。また，女性の活動そのものに余り期待しない者が多かった軍もメンバーたちの活動を評価し，軍評議会から次のような感謝がボランタリー救護部隊に寄せられた。

> 常にあらゆる条件下での熱心さ，自己犠牲，任務への献身は注目すべきものでした。彼女たちの援助なしには，傷病兵への適切な救護はできなかったでしょう。彼女たちに求められたものは多様でしたが，最大の能力と機転と善意で任務に向かってくれました[65]。

ボランタリー救護部隊設立直後の軍関係者や正規看護婦の部隊に対する冷ややかな見方は，実際の活動のなかで変化していった。そして，1917年11月21日，王立保健研究所での講演のなかで，戦時合同委員会議長A.スタンレイ（Arther Stanley）は，ボランタリー救護部隊に言及して，戦争から生まれたボランタリー救護部隊のシステムは戦後も継続することを確信していると述べた[66]。スタンレイはそれ以上は語らなかったが，戦時中のボランタリー救護部隊と女性たちの活躍のなかから，ボランタリー救護部隊の有効性を認識していた。

戦後のボランタリー救護部隊の存続と女性たちの社会進出を約束する基盤がこうして作られていった。

（３）終戦前後のボランタリー救護部隊

1918年に入ると看護婦を始め，ボランタリー救護部隊メンバーへの派遣要請は増大した。２月には，軍病院と補助病院から，コック，コック助手，家事手伝い，皿洗い，タイピスト，病棟雑役婦，病棟掃除婦などの派遣要請が相次いだ。総合サービス部門の仕事だけでなく，看護婦不足も深刻であった。同年４月には，軍病院および海軍病院での看護婦不足は，規則を変えてでも対応しなければならないほど深刻になっていた。21歳から48歳までの有能で健康な女性であれば，病院での経験や，看護資格がなくても，軍病院と海軍病院では勤務が可能となり，５月には，病院で３ヶ月勤務した者は通常の講義に参加していなくても応急処置と家庭看護の試験を受けられることになった。10月には，16歳の少女までもがボランタリー救護部隊への加入が認められた。少女は，ある時には病棟で掃除をし，また，ある時には雑役をこなした。女性ボランタリー救護部隊最高司令官のアンプスィル（Lady Ampthill）は，11月９日付けのタイムズ紙に国内で看護婦，コック，台所手伝い，家事手伝いが，海外では運転手，コック，家事手伝い，台所手伝い，病棟雑役婦がそれぞれ不足しており，ボランタリー救護部隊メンバーがこれらの活動に加わるよう呼びかけた。特にフランスでは，あらゆる種類の仕事にボランタリー救護部隊メンバーが要請された。

1918年11月11日，ドイツが休戦協定に調印し，第一次世界大戦は終わった。しかし，ボランタリー救護部隊の活動はすぐには終了したわけではなかった。というのも，停戦直後は，戦地から帰還してくる傷病兵士たちの看護と海外における戦争の後始末が必要であったからである。ボランタリー救護部隊メンバーへの派遣要請はむしろ，停戦調印後，増加すらしたのである。

ウリッジ兵器工場の管理部は，11月11日付けのタイムズ紙のボランタリー救護部隊メンバーへの活動参加のアピールを読み，戦争の終結とともに多数の女性たちが兵器工場での仕事を解除されるので，彼女たちがボランタリー救護部隊に加入できるように提案した。そして，軍需工場で働いていた女性たちのうちの希望者は，ボランタリー救護部隊メンバーとして採用されることになり，270人が新たに部隊に加入し，彼女たちはイギリス国内とフランスで活動した[67]。

戦前，ボランタリー救護部隊が各地に設立され，自主的に訓練活動をしていた女性たちは，上流階級と中流階級の出身者であった。部隊の活動には報酬が支払われないことになっていたからである。また，キャンプの訓練に参加するのには，参加料が必要であり，労働者階級の女性たちには無理なことであった。戦争が勃発し，ボランタリー救護部隊の有効性が認識されると同時にメンバー派遣の要請が高まり，メンバー不足が深刻になっていく過程で，人員不足の解消のため一部の活動が有給となっていった。

しかし，戦争中，労働者階級の女性たちにとって，応急処置と家庭看護の資格を取り，海外にまで出かけていくボランタリー救護部隊メンバーになることは困難なことであった。ボランタリー救護部隊は，あくまで，自らの意志で国内外で活動する上流階級・中流階級の女性たちのものであった。しかし，皮肉にも戦争が終結した後，ボランタリー救護部隊の活動に労働者階級の女性たちも組織されていった。戦争中，軍需工場で働き，終戦後仕事を失った女性たちは，呼びかけに応え，ボランタリー救護部隊メ

ンバーとなった。まさしく「ボランタリー救護部隊の活動は，社会のすべての階級を一つにした経験」[68] となったのである。終戦後の1919年から1920年にかけてもボランタリー救護部隊へのメンバー派遣要請は続いた。1920年3月におけるボランタリー救護部隊の合計数は3141部隊であり，部隊メンバーは9万1116人，そのうち女性は，6万6361人であった[69]。戦争末期の1918年7月の部隊数は3382部隊であったが[70]，戦後2年近くたっているにも関わらず，これだけの数の部隊が残っていたのである。陸軍病院と海軍病院からの看護婦だけでなく，事務，雑役，運転手などの仕事にも派遣要請があった。

この時期になるとボランタリー救護部隊は，戦争中とは異なった仕事にもつくよう要請されるようになっていった。例えば，1919年半ばになると，年金省は，31歳以上であること，両親または親戚の同意を得ること，州長官の同意を得ることという条件付きで，精神疾患を患っている兵士のいる病院へメンバーを派遣するよう要請をした[71]。

また，結核患者の介護や児童福祉の分野への活動も要請され始めた。ボランタリー救護部隊メンバーは戦争の後始末から，徐々に,福祉や医療,保健の領域に入っていったが，その経緯は稿を改めて検討することにしたい。

おわりに

第一次世界大戦直前から戦後までのイギリス赤十字社・ボランタリー救護部隊の活動の変遷をみてきたが，最後にボランタリー救護部隊の活動の特徴をまとめてみたい。まず第一に，ボランタリー救護部隊計画は陸軍省によって作成されたものであるが，その組織化は赤十字社をはじめとするボランタリー組織に一任された。第二に，約8万人を数える女性たちが，ボランタリーな意志で救護部隊に参加していった。第三に，戦争直前まで，救護部隊の訓練は各部隊に任され，女性たちは自主的に訓練活動を行っていた。第四に，戦時救護活動をする組織は赤十字だけでなく，ほかにも聖ヨハネ修道会や聖アンドリュー救急車協会などが存在し，組織間の軋轢や競合の一方で，各組織は協同行動をとった。したがって，このことは赤十字社に独占的立場を取ることを回避させ，常に陸軍省やほかのボランタリー組織との相談，調整活動を必要とさせた。これらの特徴は，イギリスボランタリズムの伝統からくるものであった。

しかし，このようにボランタリズムの影響を受けながらも，赤十字の活動はジュネーブ条約に拘束され，戦時下には軍の管理下に入らねばならなかった。したがって，ボランタリー救護部隊の有効性が明らかなるにつれ，部隊はボランタリーな側面を失い，軍隊化していった。

一方，ボランタリーな意志で部隊の活動に参加した女性たちのなかには，戦後社会において，福祉や保健の分野に進出するものも少なくなかった。イギリス赤十字社・ボランタリー救護部隊は，イギリスボランタリズムの伝統の上に可能となった活動であり，女性たちの力を引き出し，それを社会に証明した活動でもあった。

注

1)　The British Red Cross Society, *The Red Cross The Official Journal of the British Red Cross Society*, The British Red Cross Society, 1914-1920. これ以降の引用は，*The Red Cross* とする。*The Red Cross* は，1914年に発行されて以来，その呼称を変えながら現在まで発行され続けて

いる。*The Red Cross*（1914-1956），*News Review of the British Red Cross Society*（1957-1971），*Cross Talk*（1972-June, 1975），*Red Cross News*（July,1975-1990），*British Red Cross News*（1991-1993），*In Contact*（1994-1998），*Red Cross Life*（1999-）と雑誌のタイトルは変わってきた。

２） The Joint War Committee and the Joint War Finance Committee of the British Red Cross Society and the Order of St.John of Jerusalem in England, *Reports by the Joint War Commitee and the Joint War Finance Committee of the British Red Cross Society and the Order of St.John of Jerusalem in England on Voluntary Aid rendered to the Sick and Wounded at Hme and Abroad and to British Prisoners of War, 1914-1919 with Appendices*（London: HMSO, 1921）. 以降の引用は，The Joint War Committee, *Reports*とする。

３） The imperial War Museum＜Microform＞, *The Women at War Collection from the Imperial War Museum, Part 2: British Red Cross Society, Colonies, Decorations and Honours and Education.*（London: Harvester Press Microform Publications LTD, 1985）. これ以降の引用は，The Imperial War Museum＜Microform＞とする。

４） The Imperial War Museum, Collection of Documents, 85/33/1.これ以降，引用は，The Imperial War Museum＜Collecton＞とする。

５） Anne Summers, *Angels and Citizens* : *British Women as Military Nurses*, 1854-1914（London and New York: Routledge and Kegan Paul, 1988）, p.253.

６） *Ibid*., p.264.

７） *Ibid*., p.266.

８） *Ibid*., p.266.

９） *Ibid*., p.268.

10） *Ibid*., p.268.

11） Branch Reports, *The Red Cross*, May 1914, p.140.

12） Branch Reports, *The Red Cross*, March 1914, p.70.

13） Branch Reports, *The Red Cross*, July 1914, p.212.

14） Branch Reports, *The Red Cross*, March 1914, p.69.

15） Branch Reports, *The Red Cross*, February 1914, p.44.

16） Brnnch Reports, *The Red Cross*, July 1914, p.250.

17） “Women and Cookery”, *The Red Cross*, October 1914, p.343.

18） Miss E. P. Hughes, “Red Cross Camps at Barry Island, Glamorganshire. 1911,1912 and 1913”, *The Red Cross*, February 1914, pp.55-58.

19） *Ibid*., p.58.

20） *Ibid*., p.58.

21） Thekla Bowser, *The Story of British V.A.D.Work in the Great War*（London: Andrew Melrose, 1917）, p.27.

22） Miss E.P. Hughes, *op.cit*., p.58.

23） Ibid., p.58.

24） Mrs,Lancelot Dent, “Hints on British Red Cross Detachment Camping”, *The Red Cross*, April 1914, p.125.

25） Bowser, *op.cit*., p.22.

26） W.G.Macpherson, *Medical Services General History, vol.1: Medical Services in the United Kingdom; in British Garrisons Overseas; and During Operations against Tsingtau, in Togoland, the Cameroons, amd Soth-West Africa*（London: HMSO, 1921）, p.56.

27） The Joint War Committee, *Reports*, *op.cit*., p.191.

28） 赤十字の中央組織は次のようになっていた。パトロン（王と女王），総裁（アレキサンドラ王妃），評議会議長，執行委員会議長，副執行委員会議長を指導部とし，評議会議長のもとに副評議会議長はじめ40名の評議会委員，そのうちの25名によって執行委員会が構成された。常任委員会は，1905年の赤十字再編時には設置されておらず，戦争の勃発とともに新たに作られたと思われる。

29） The Joint War Committee, *Reports*, *op.cit*., p.693.

30）　*Ibid*.,p.191.

31）　Bowser, *op.cit*., p.22.

32）　The Joint War Committee, *Reports*, *op.cit*., p.191.

33）　高い身分には義務が伴うというノブレス・オブリージ（noblesse oblige）という理念によってエリート層の若者たちは率先して戦場へ向かった。実際，第一次・第二次世界大戦を通じて，パブリックスクールの卒業生の戦死率が最も高かった。加瀬英明『イギリス衰亡しない伝統国家』講談社，2000年，91頁。

34）　"Women and the Medical Profession",*The Red Cross*, March 1915, p.63.

35）　*Ibid*., p.64.

36）　The Joint War Committee, *Reports*, *op.cit*.,p.193.

37）　*Ibid*., p.191.

38）　*Ibid*., p.192.

39）　村岡健治・木畑洋一編『世界歴史体系　イギリス史３近現代』，山川出版社，1999年［1991年］，265頁。

40）　V.A.D. Selection Board, *The British Red Cross Society, Instructions to V.A.D. Members Serving in Hospitals*, July 1915, The Imperial War Museum＜Microform＞, *op.cit*., Reel 27, BRC 10-2/12.

41）　ハチンソンは，普仏戦争における傷病兵救護員が赤十字の腕章をつけただけの非公式の補助的活動だったのに対し，第一次世界大戦では明確な軍医療部隊の補完役として，制服を着用し行進するボランタリー救護部隊について記述し，部隊の軍隊化が進んでいったことを明らかにしている。（cf. John F.Hutchinson, *Champions of Charity*, Boulder: Westview, 1996, pp.184-185.）

42）　The Joint War Committee, *Reports*, p.195.

43）　*Ibid*., p.195.

44）　Katharine Furse, "An Open Letter to V.A.D. Officers and Members", *The Red Cross*, May 1916, p.58.

45）　Katharine Furse, "Appeal to V.A.D. Members, June 7, 1916", The Imperial War Museum＜Collection＞

46）　*Ibid*.,

47）　Katharine Furse, "Duty and Discipline", *The Red Cross*, October 1916, p.128.

48）　Katharine Furse, "What we want included in the national service appeal to women to join Voluntary Aid Detachments, April 12, 1917", The Imperial War Museumn＜Microform＞ Reel 27 , BRC 10-1/2.

49）　Katharine Furse, "Duty and Discipline", *The Red Cross*, October 1916, p.127.

50）　"Women's V.A.D. Notes and News", *The Red Cross*, April 1917, p.46.

51）　*Ibid*., p.47.

52）　Katharine Furse, "Appeal for more V.A.D. Volunteers", *The Red Cross*, April 1917, p.48.

53）　契約の際の条件と内容は次の14項目だった。①任務期間，②給料，③運賃，宿舎，食料，④イギリス国民であり，王に忠誠を尽くすという宣言，⑤軍事法と規律への服従，⑥新聞社や記者との対応，⑦服従，⑧不服従，⑨長官の権威に服従，⑩海軍および空軍による承認，⑪事故や死亡の際の赤十字の対応，⑫メンバーによる契約終了の申し出，⑬制服やパスポートの返却，⑭契約に関する疑義から成っていた。ボランタリーという呼称からは想像できないほど，身分や待遇は厳格に決められ，王，軍に対する忠誠と服従が強調された。The Joint War Committee, *Reports*, p.199.

54）　Katharine Furse, "The Work V.A.Ds Do", The Imperial War Museum＜Microform＞ Reel 27, BRC 10-1/5.

55）　Eleonora B. Pemberton, "Letters from France, December 19, 1914", The Imperial War Museum ＜Collection＞85/11/1.

56）　*Ibid*.,

57）　Jocelyn Hunt and Trustees of the Imperial War Museum, "First person accounts: nurses［VAD and FANY］", *War Women of Britain: Women at War 1914-1918*,（London: The Imperial War Museum.,1999）.

58）　*Ibid*.,

59）　Lynne Layton, "Vera Brittain's Testament

(s)" in Margaret Randolph Higonnet(ed.), *Behind the Lines. Gender and the Two World Wars*(New Haven and London: Yale University,1999), p.72.

60） Vera M.Brittain, *Verses of A VAD*（London: The Imperial War Museum, 1995), p.21.

61） *Ibid*., p.34.

62） "Women's V.A.D. Notes and News", *The Red Cross*, January 1917, p.6.

63） Brittain, *op.cit*., p.66.

64） "Women's V.A.D.Notes and News", *The Red Cross*, February 1917, p.18.

65） "Women's V.A.D.Notes and News", *The Red Cross*, May 1919, p.53.

66） "Sir Arthur Stanley on Red Cross Work", *The Red Cross*, December 1917, p.161.

67） "Women's V.A.D. Notes and News", *The Red Cross*, December 1918, p.142.

68） Bowser, *op.cit*., p.13.

69） "Official News", *The Red Cross*, March 1920, p.26.

70） 拙稿「第一次世界大戦期イギリスにおける戦時救護活動――イギリス赤十字社・ボランタリー救護部隊の確立と戦時合同委員会の成立をめぐって――」『立命館産業社会論集』第38巻第２号，2002年９月，96頁。

71） "The General Letter of the Central Joint V.A.D. Committee", *The Red Cross*, June 1919, p.63.

Voluntary Aid Detachments of the British Red Cross Society during World War Ⅰ
— Militarization of Detachments and the Activities of the Female Members —

KUROKAWA Ayako＊

Abstract: Voluntary Aid Detachments were set up all over England based on the “Scheme for the Organization of Voluntary Aid in England and Wales” established by the War Office in 1909 to aid the sick and wounded in times of war. The Detachments played an important role during World War Ⅰ, and were reorganized as new “-Voluntary Aid Detachments-” in 1923, and then continued their activities during World War Ⅱ as well. In 1984, the Detachments had accomplished their mission and evaporated into history. The tradition of British voluntarism was reflected in the activities of these Voluntary Aid Detachments. They were a development of the partnership between the state and vluntary organizations, that started around the end of nineteenth century and the beginning of twentieth century. However, the British Red Cross Society, which was asked by the War Office to organize the Voluntary Aid Detachments, was distinct from other voluntary organizations, in that it was to both observe the Geneva Convention and be controlled by the War Office. In fact, Voluntary Aid Detachments were not able to play their roles without the cooporation of the War Office. Therefore, though there seems to be a tradition of British voluntarism in the activities of the Detachments, they were militarized and gradually lost their voluntary elements as World War Ⅰ progressed. At the same time, the well-disciplined behavior of the female members of the Detachments, who were not given opportunities to be active in society, brought out their previously untapped potential and led to appreciation of their value.

Keywords: voluntary training by female members, militaraization of Voluntary Aid Detachments, participation of women in public affairs, tradition of British voluntarism

＊Graduate Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University